

第5回京都市美術館評議員会「将来構想検討委員会」 摘録

日 時：平成26年3月3日（月）午後2時～午後4時

場 所：京都市美術館2階応接室

出 席：上村 淳之委員，太田垣 實委員，梶谷 宣子委員，川嶋 啓子委員，倉森 京子委員，
高橋 信也委員，建畠 哲委員，細見 良行委員，松尾 恵委員，門内 輝行委員，
奥 美里委員（文化芸術担当局長），潮江 宏三副委員長

（欠席）内山 武夫委員，加須屋 明子委員，布垣 豊委員，福本 双紅委員，蓑 豊委員

事務局：森川 佳昭文化芸術都市推進室長，鋒山 隆美術館副館長ほか

1. 開 会

2. 挨拶

潮江 宏三副委員長

3. 議 事

議題1 京都市美術館将来構想に関する市民意見の募集結果について（事務局説明）

委員：パブリックコメントのご意見をいただいた方，20代の方が少ないように思う。議会からの意見でも「芸術系大学の学生への周知」という項目があったが，そのあたりは回答自体が少なかったのか，周知が足りなかったのか。

事務局：周知という意味では，京都市立芸大をはじめ，京都の芸術大学にすべて送付したが，そこから意見を回収する部分の取組が弱かったかと反省している。

委員：若い人はパブリックコメント自体の意味をあまり理解していない人が多い。一般の他の調査と比較してどうなのか。また，ギャップが小さかったとはいえ，せっかくいただいた意見を答申にどのように反映するのか。

委員：パブリックコメントを数多く手掛けているが，187件というのは，京都市のパブリックコメントとしては多かったと思う。美術館の将来構想というわかりやすいテーマだったので関心が高かったと考える。

事務局：ここ半年の京都市のパブリックコメントでは一番多かった。さらに特筆すべきは，意見総数が非常に多かった，つまりそれぞれの方からたくさんのご意見をいただいた。答申案への反映については，後程ご説明させていただくが，全体としてご賛同の意見が多かったことや中間まとめにすでに含まれている内容が多かったことから，修正は最小限にとどめている。

委員：ご意見者数が187で意見総数が736ということは，関心のある方が多様な御意見を持っていることであり，しかも，我々の答申案と概ね距離のない意見をいただいている。ということは，関心のあるかたは，すでに独自にこういった同じ認識を持ち，美術を見るコモンセンスを持っておられる。これは喜ぶべき事であると同時に，むしろちゃんと応えていかなければならないということだと思う。

議題2 京都市美術館将来構想答申（案）について（事務局説明）

委員：大変穏健なとりまとめだった。これだけの委員会を設置するならば、もっと踏み込んだ内容であってほしかったと思うが、とって私に具体案があるわけではない。この美術館を取り巻く環境は、夜は完全に死んだ森になっている。もっと有効に使いたい。最近、若者が横行しているが、もう少し知的な若者が岡崎中心に集まるようにもって行ってほしいと思っていた。一昔前は、大阪市の美術館が夜、物騒で歩けない状態であったが、今はそれほどではなくなっている。上野の森があまり思わしくない方向にいつているが、広すぎて取締りができていないと聞く。京都市美術館は上野のように広くないので、時間的にもっと有効な使い方ができるゾーンにしてほしいと、美術館を利用している立場として思う。

委員：パブリックコメントを受けての修正部分について、8頁2の(2)「京都にゆかりの王朝文化や町衆文化・・・」に関して、基本的にはよいが、具体的に想像してみると、今までの流れだと京都国立博物館でやることになる。また今年のはじめ「皇室の名品 近代日本美術の粋」は京近美でやっていた。町衆文化については京都文化博物館が先行し、祇園祭の山鉾の常設展示もある。こういう先例に対して、どうすみ分けて、京都市美術館でどういうふうやっていくのか、そういうニュアンスがもう少し盛り込めたらと思う。

副委員長：2の(2)の表現については、少し具体性のはっきりしないバラ色の表現になっている。

委員：「1 未来に向けて、歴史を紡いで」(1)～(4)の項目は基本的に良い。最近、工芸の今井さん、森野さんと話す機会があり、伝えてほしいといわれたことで、近代の美術家・工芸家が亡くなっても、創作の背景になっていた下絵、道具などが散失しないように、(例えば稲垣さんが使っていた型染めの道具など)、京都市美術館が収集してほしいということで、これが(4)のところにプラスされればと思う。

副委員長：工芸作家の使用した道具等を保存していくことは京都市美術館が取り組むべき課題だと思っている。8頁の1-(4)は、京都の部分を強調した方がよいのか、また資料収集のところ具体的に表記するなどが考えられる。

委員：京都府の美術工芸担当課からの提言で、琳派400年を記念して、日本画家協会、工芸作家協会で開催を企画して実施してほしいということがあり、若手を中心に50人という人選に悩んでいる。また、時雨殿が、小倉百人一首の書と関連した絵を集めることを計画していて、村田会頭から頼まれている。費用は屏風をつくることだけに使い、寄付行為で100枚の絵を集めることを進めている。京都市美術館もオリンピックに向けて、日本の文化の根幹はここにあるという企画を少しずつ進めてほしい。

副委員長：京都府は日本画家協会、工芸作家協会、彫刻家協会を束ねている。京都市ではそういう作業はしていないので、そういう形での取り組みはむずかしいと思うが、重要な指摘なので体制も含めて検討していきたい。

委員：アメリカから聞こえてきたことで、西陣織の山口さんの作品をアメリカの美術館に買わないか

という話があった。なぜ京都市美術館や大阪市美術館に話がこないのか、京都市美術館はお金がないから買わないとはじめから決めつけている。お金より美術館の意味が大事だと私は思います。構想については、40年間、館のミッション・ステートメントを具体化して実行するのが私の仕事だったのですが、この構想を見ながら、具体的なことを考えてきたのですが、この構想はどちらかという外に向けた構想であって、中で実際に働いているものとしては、これを具体的に実践していくのに、どれだけの人材、場所、お金がいるのか、また、思いもかけないところに多大な人力やお金がいるということをどれだけ市民の方がわかっていただけなのか、憶測できない。ここに書いている事は、どちらかというミッション・ステートメントであり、これを実際にやっていくためにどこまでつめていくのかを考えてしまう。ここに書いてあることには賛成といたします。

副委員長：美術館も受け身ではなく、こうしたいということがある。具体的には組織、人材をどうするのか、どういう人材を活用するのか、ほかの先進的な取組をしている美術館を参考にしながら検討していきたい。

委員：工芸が重点化されたこと、世界的視野立って京都の文化芸術を発信することを大きな課題とされたこともうれしい。京都市美術館がコアになって観光客や市民のインフォメーション・センターになればいいと思う。工芸を支えている職人に関する調査もできればいいかなと思う。

副委員長：インフォメーション・センターのようなブロック、スペースを設けることは検討に値する。このあたりに来て、どういうふうにアプローチしていいのか、うろうろしている人を見かける。

委員：この美術館の一番の問題は学芸スタッフが手薄だということ。その改善については、最後の運営体制に少しだけ書いてある、それで良いのだろうか。これがお作法なのかもしれないが。3頁、この美術館の展覧会は、巡回展、企画展、常設展の3本柱になる、そういうふうにまとめたらどうか。

副委員長：今後のことは、7頁・8頁に書いてある。ここは、これまでの強みが書いてある所なので、これで良いのでは。

委員：8頁に王朝文化や町衆文化が書き加えられているが、京都はアバンギャルドにも先進的に取り組んだ伝統もあることも書くべきだ。

副委員長：パブリックコメントを受けて、そのような書き加えを行ったが、仰っている趣旨は、その上にある、現代作家の展覧会をやって行くというところに、書かれていると思う。

委員：8頁の別館の専門性強化というのはどういうことか。市民ギャラリーにすることが専門性を高めることになるのか。

副委員長：本館に対して別館、付け足しという位置づけではなくて、例えば工芸ギャラリーとか、市民ギャラリーとか、性格をはっきりさせ、独自のものにしたいという趣旨なので、誤解を与えないよう、もう少し検討の余地がある。

委員：7頁の方向性の表現が的確かどうか。お作法もあろうかとは思いますが、これまでの議論のなかで抽出され、パブコメでもほぼ支持されたキー・ワードを、もう少し鮮明に打ち出した文言にするべきではないか。

副委員長：それについては、委員の皆様のご意見に期待したい。

委員：今後、これらを実現するに相応しい手順と流れをどう考えるべきか。

副委員長：最初の作業は、答申案実現のための組織の強化、特に学芸、広報等は現在の3～4倍確保しないと、期待される活動はできない。それを自治体財政の許す範囲で確保し、一番効率的に運営できる形態で組織するよう検討したい。直営が望ましいとは思いますが、他の形態も検討する。空間整備については、建築費がどれだけ確保できるか、ということに掛っている。余力があれば、当館が所蔵している古い美術資料の整理・保存・公開などもやりたいが、更にスタッフの強化が必要になる。それは次のステップになるかもしれない。

事務局：この提言を受けて、美術館内の作業として、ひとつひとつ、項目ごとにどうやって具体化していけばいいのか、どれだけ人員が必要になるのかということ、検討することになる。

委員：書かれていることすべてを同時に実現することはできない。どうしても優先順位をつけなければいけなくなる。そのときの判断が問題。例えば、中庭の活用などは、印象を変えるのには効果的だと私は思う。それに対して夜間開館は、岡崎地域全体のイベントとして、あるいは夜の賑わい作りと連動してやるなら効果があるが、単なる開館時間延長では効果は全く無い。資料の保存収集公開は、非常に重要なのだが、人手がかかる。指定管理者制度の導入はすべきでない。導入した館もそろそろやめたらどうかという傾向になってきている。独法化は公立美術館でも可能になったが、良し悪しだ。直営がベターだと思う。書かれている学校教育との連携では、小学校・中学校との連携は可能だが、高校生が難しい。難しいけれども大切な時期だ。選ばれた高校生のリベラル・アーツ・プログラムとしてなら、できるかもしれない。

委員：京都には美術系大学の学生・大学院生が沢山いる。彼らをインターンとして活用することをやるべきだ。お金がかからない。

副委員長：インターンについては、今は京都市の人事制度上できない。制度問題の調整が必要である。

委員：インターンを募集すれば、希望者は10倍、20倍いる。ファンを広げるためにも是非やるべきだ。

委員：いま地方の美術館は熱い。京都もこれを最初の一步として、盛り上がることを期待したい。欧米の美術館の動向を考えると、今後、入館者の荷物を金属探知機で調べるようになるだろう。その場合、現在の玄関スペースは狭すぎる。チェック前の客溜りスペースをどうするか等も検討が必要になるだろう。

委員：7頁の4を2にすべきではないか。2・3は手段である。順番を変えることによって、8頁・

9頁の項目も整理できるのではないか。

委員：答申はバランスよくまとまっている。梶谷さんが言われたミッション・ステートメントは重要だと思う。美術館は生きる力を思い出させてくれる、生命の根源にかかわる非常に重要な場所だ。そのことを誰に伝えるかという点、子どもから高齢者まで幅広い世代の市民、だから7頁の方向性の2番目に入っている。この市民には他地域に住む訪問者、交流人口も含まれるし、これから生まれてくる未来の市民も含まれる。

委員：8頁の2の(1)は、タイトルと説明が不一致。現代美術は、若い世代のためではなくて、未来に向けてだから、1の方に入れるべき。夜間開館、カフェ、レストランは本当に要るのだろうか。最近アートボックスという情報提供が始まった。美術館の情報との連携が必要。京都市の文化政策はばらばらで無駄が多い。

副委員長：精査したい。レストランはともかく昼食がとれるスペースは必要だ。京都市の文化行政全体の連携の必要は感じている。例えば新人賞が決まったら、それを顕彰する展覧会を美術館で開催するなど、やるべきことが、出来ていない。

委員：美術館単一で勝負する時代ではない、美術館がマグネットのひとつとなって、他施設と連携して運営し、岡崎エリア全体として打ち出して行くべきだ。施設を作る場合、こういう提言が出来たから、コンペをやって、設計させて、できるものではない。特に、ここに書かれている大きなミッションから些細なディテールに至るまで、更に専門家の意見を聴きながら、条件に応じて修正しながらも、当初の理想に執念を持って、必死で実現していこうという人たちがいないと、書かれた提言は絶対に実現できない。プロセス・デザインというものが非常に重要だ。提言が総花的に見えると言われるのは、そういう強烈な精神がこの提言では表現できていないからかもしれない。

副委員長：委員の皆様のご意見をふまえて、提言を精査したい。

(以上)